

集

俳句フォーラム

2016年1月 第58号



靖国神社

田中藤穂

神の池一羽に馴れし残り鴨
招魂社たましいのごと蜻蛉群れ
戦死者の錆びし印鑑青葉臭
黒揚羽海軍カレーは明治の味
空耳にジンタ青葉の招魂社

助詞ひとつ

浦川哲子

助詞ひとつ 揮然として野分中
点滴のはるか秋天ありにけり
せめぎ合う底の路地や小鳥来る
遠き日の切れし下駄の緒秋夕焼
行く秋や谷中銀座のがんもどき

へちま汁

平野無石

自由てふ不自由なものパリ祭
じぐざぐに曲る木の橋鬼やんま
敬老のリズム都電の鈴さやか
山の湯の遅き朝餉やへちま汁
山の湯の故郷自慢天の川

秋思

都築繁子

空の青川の氾濫見し秋思
荒川線の狭き踏切秋薔薇
零戦や若きみたまを思う夏
八月や昭和の記憶溢れ出す
出来ること数えて安堵今朝の秋

甘酒茶屋

植木やす子

大鳥居みたまに参る梅雨晴間
風が出てあかねと渡る神の池
夏木立茶屋の株椅子湿りをり
空高し街なかギシギシ荒川線
長雨のようやく上り鱚雲

無心

大山夏子

黒揚羽つれてくぐりし大鳥居
献灯の黄色つらなる敗戦日
神池をわたる飛石蝶も居て
失念も気落ちもともに髪洗う
無心なり夏満月と対峙して

鮫洲旧漁師町を歩く

大山夏子

鮫洲は、かつて東京湾の代表的な漁師町だった。梅雨に入った六月の一日、京浜急行で品川から十分ほど、鮫洲駅で降りる。急行は止まらないが、エレベーターもエスカレーターも完備した立派な高架駅である。自動車運転免許試験場があるので、免許を取られた方はご存知と思うが、昔は本当に小さな駅だった。鮫洲駅を真中に、両隣の立会川駅から青物横丁駅まで二駅間

が、数十年前私の通学路であった。青物横丁駅から海の方へ徒歩五分ほどの都立八潮高校へ徒歩通学をしていたのである。戦後の通勤通学時間帯の混雑はひどいもので、子供の力ではとても乗れる状態ではなかったのだ。お陰で足が丈夫になったのかもしれないと思っている。

八潮高校校歌 二番（一番略）

品川沖の朝な夕なに

時を違えず寄する潮の

おお、その動きて止まぬ姿は

これぞ我が心の掟（三番以下略）

八潮高校の校歌にも歌われた海は、埋め立てられ見る影もないが、私の在籍していた頃もすでに埋め立ては始まっていたのだと思う。それでも旧国道の先に行けばまだ幾らかは見たのではないか、と思っっている。今でも鮫洲に住んでいる友人によると、家の裏手の入り江で海苔がとれたという。

鮫洲駅のすぐそばにある鮫洲八幡神社は、漁師や魚河岸の人々の信仰を集めていた。神社は建てかえられているが、漁業関係者が寄付したという大きな灯籠や狛犬が立ち、石柱などに、漁師、魚仲買などの文字が

残っている。古びた池や、ここまで海だったという名残がみられ、訪れる人もなくひっそりとした空間にしばし昔を偲んだ。

額の花昔漁港の古社

無石

海の宮緑陰の池亀泳ぐ

藤穂

十葉の白さひときわ八幡宮

やす子

南天の花八幡様の池汚す

夏子

旧東海道沿いの商店街には、大漁旗を擬したジンベエザメを描いた旗が立ち並んでいる。サメというよりフグに似た可愛い絵である。かつて私が歩いた頃の木造家屋は近代的な建築にかわり、漁師町の面影は見られない。旧東海道を東に横切ると新設間もないと思われるような鮫洲運動公園、その隣に児童公園があり、周辺は見渡す限り高層建築が立ち並んでいる。公園傍の道路は「元なぎさ通り」という。道路の名が僅かに豊かな海が埋め立てられた歴史を伝えていた。

梅雨晴間鮫の旗立て商店街

無石

梅雨しとど遊具の下の木のチップ

繁子

黒南風やぶらり東京漁師町

夏子

旧東海道に戻って西に進むと、勝島運河が見えてくる。このあたりに船宿が残っている。開け放たれた玄関に神棚があったのを見逃さずに詠んだ人も。船宿の看板だけでビルになっているところも見られた。船宿のすぐ先が土手になり勝島運河が直角に曲がって、鮫洲橋を潜り京浜運河と合流している。京浜運河の上にはモノレールが走り、平和島を通り羽田空港へと続いてゆく。海はその先である。

梅雨の運河水輪広がりては消ゆる

夏子

さみだれや思いを馳せる空港へ

繁子

土手になると、小さいながら勝島運河の突き当りのような船溜まりに、今通ってきた船宿の釣舟が繋留されていた。少し上流に、もう一か所船溜まりが見え幾つか船が繋がれていて、格好の句材になった。

玄関に神棚梅雨の船宿に

藤穂

屋形船繋がれ待機穴子漁

繁子

釣舟や餌は蚯蚓か朝の海

やす子

浮玉を束ねて梅雨の船溜り

藤穂

鮫洲駅から直結の歩道橋で、第一京浜国道を渡った

あたり、小高い学校の敷地の中に鮫洲に隠居していた幕末の土佐藩主、山内容堂の墓があり品川区の指定史跡になっている。また、江戸時代大名が宿泊する本陣が置かれた本陣跡。明治天皇が休憩した行在所としても使われたことから「聖蹟」の名が残る聖蹟公園かつて波止場があり、三代將軍徳川家光が東海道に入る時、沢庵和尚が迎えに出て問答をしたという問答河岸跡など少し足をのばせば旧跡がまだありそうだ。



大あくび

江口九星

白粉花や夕闇の香の彷徨す
遠雷のにぶき光や遠吠える
真夏日も健やかみどり児大あくび
羽化出来ぬままの蟬いて夕暮れる
とれたてのトマト大小ガラス皿

迷

大山夏子

墓のそり奪衣婆冥し堂の内
夏風邪や推理小説いま佳境
熱帯魚が見られているらしい
地藏盆香花供えし子らがいて
赤い服の迷子放送天高し

落毬

関桂二

落毬に覗きし栗の艶やかさ
兜虫放す休みの最終日
婿の縫う孫の甚平可憐なり
花莫蔭に足だけのこし眠りし児
夜釣りかな円い海に星落つる

阿弥陀堂

石川賢吾

炎昼や鷺差し足のよろめいて
木洩れ日に貴婦人めくや揚羽蝶
今朝の秋包丁研ぐや時かけて
秋気澄む開け放されし阿弥陀堂
流星やオープンカフェの予約席

どくだみ

渡辺節子

ざわざわと血かき乱す曼珠沙華
夏嵐過ぎて広々空青し
たつぷりと潮の香含む南紅梅
どくだみの花の純白常夜灯
荒れ庭をどくだみ占拠外国も

案山子

中川のぼる

他愛ごと悩む佳人の薄暑かな
葉の色も衰える胡瓜夕暮れて
放心の時を地でゆく案山子
爽やかに朝一番の背伸びかな
備忘録に蒼天おいて秋の雨

笹飾り

吉宇田麻衣

小さき児の小さき願いや笹飾
夏休みの登園嫌がる甘えっ子
チリチリと鍋の中にもセミの声
川遊びの思い出刻む絵日記に
身の一つおろし八月終わりけり

炉明り

伊藤昌枝

木葉髪風がいたずらして木の葉
鱒漁鬼より怖き涛風巻く
駒ヶ岳雲より出でて麦の青芽
炉明りや歳月語る太柱
片時雨木肌あらわに白くなる

薩摩富士

楠本和弘

湾内に灰雨けぶる芒かな
新米や囃子聞こゆる畔の上
初槿花咲く庭陰や薩摩富士
得たりやな瀬戸の島々月今宵
丸太橋行きつ戻りつ紅葉川

